

七部集大鏡

員曠野并
外并

三

中村俊定文庫

文庫 18

999

4

2 3 4 4 5 6 7 8 9 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 9 80 1

曠野
炭俵

并

員外





曠野

信濃何九撰釋

序文の内いとゆふのいとすなる心のとの
ありの形事いふをとりわて

愚考源氏よあしくてみくろ形事いものそけ
ろふのあろるるをたろの世よあそあろを建自
然よあらハあめのみ美言ろり

芭蕉決日翁云ま人の長々分りて四一位の
るをよりとれりつるもあそむそ建をよりと
れりろ白をよろり一ろりよりあそむとせりよ
句よりろ一上采めろる心のとろこのぬ故よ

よりろぬと控一津く浦くを境波濤のこ
きり豊ひ何はめてあしをえろろ一ろりとして
いりて集とりよ一げむ我後見の集る我家の侘
憐の一体の密一りて我心よ應をさろ白一白
ものそん曠世集よ貞室宗因等ろるをの
きろろる我家の侘憐の侍ろる建ハ之形けり
しきろる侘憐の俚言ろる故よ文盲愚昧れ
ののそく口ろ建て自己よ侘憐を^知まろろと
おろふりの多く出来侍る心元俗の今日ろ
建ハ何とろきむのくいとそを他の人を建
むろのそあろ我家の侘憐を説むを^めこ穴
ろりころちをろる^はろり事外ろ建^と曲翠よ
造りろるろりと云く或書よ翁の曰我侘憐の
考ときろるを知てまろるるとき^は沃を知り

るしと愚老たれらる能く雀舌の人此れいふ
て能き白をとりしやれども能く是れいふ
甚しむ言るる初心として他の白を批判
すりよ又斤をとりし業よ中をとりし人の力
よよりてあとのつらきも抱ふらぬめり 既ふ
濫の白を荊口と行去る見えそこをいひ世
の附もいふを去るぬ歎ひ流化子といふ
孔翁の白を解しそてるいふ文類や林を此
白をとりしと思ふの致しむを考ふも扇引
の白をとりし思ふの致しむを考ふも扇引
及んさりの惠子よあはれや上是の孝
れぬしよして後世の今よれいしてんや
是れしととり花の吉野山

愚考 依川田喜六の峯の白雲をいふも
るしはる 古今の名今も世の人口に有
て何れ故よ名考るるやと同一時よは
ぬるりるしよて根えを去るぬあそ
るまは考る書りの入祖翁吉野を考
る貞室の書るしよはよるる我又
をりて白の手明そりの柳下惠り
よ似されるとして彼名よ一
たりひ出て歎書るりも軍書るり
此又考るりよは一白此
しる五文字のみ廢りるるあ
山を黄金地りよよ金峯山と名
の清嶽と云 辰旦より花來り
峯と云は山しよ有杯鐘といふ山と鐘と

列て飛来り鐘く扱社法見来天皇御製み
うのそよりとより見てよりとひいしありよ
く見よよき人よきみ世心あり人よ此御製み
のよきよきよりよきよきよきよきよきよ
よりよきよきよきよきよきよきよきよ
吉野見えて花をよきよきよきよきよきよ
士御かふるよ花をよきよきよきよきよ
よりよきよきよきよきよきよきよきよ
されん御水よりよきよきよきよきよきよ
よきよきよきよきよきよきよきよきよ
てよきよきよきよきよきよきよきよきよ
皆彼御製よりよきよきよきよきよきよ
白れ沃ち吉野よりよきよきよきよきよ
花をよきよきよきよきよきよきよきよ

の中よ花よりよきよきよきよきよきよ
よりよきよきよきよきよきよきよきよ
御製をよきよきよきよきよきよきよ
流石の御製をよきよきよきよきよきよ
く貞室の御製よりよきよきよきよきよ
申しし御製よりよきよきよきよきよきよ
よきよきよきよきよきよきよきよきよ

何よりそ花より人の 吉野
楠花曰道元様御の御製よりよきよきよ
紫衣袋猫の御製よりよきよきよきよ
此の御製よりよきよきよきよきよきよ

吉野の雲 少しよ花よりよきよきよ
吉連曰堀川百首よ色よりよきよきよ
よきよきよきよきよきよきよきよきよ

下しの中の花といふ事ある花の宿

敬歌曰左傳曰師一宿為舍再宿為信過信為
次信を信一一夜泊るを上の客二夜泊るを
中の客三夜泊るを下の客とす下しの中
と何事ハ花の七日を泊りて心の静けを惜まむ
見よし一棹よ減ぬ花 此 滝

莫不曰すくく人然然いきて客の言一山わたり
はる電も禁るありのきり正歌を歌う一

らり花を酒 盗 人よ

愚考万葉よさる花きり木根のたふらけてありふと
らの并ての後まらりぬともよその盃あつ
るよ花の歌のらりゆくよ盃をたふらけて
さし酒盗人よといふ心なる一
ありありや初花よりの拙忘れ

愚考有りありありの信よゆき有りといふ倫安
と書りや

檀の本の花よりかきぬすく

愚考檀の本を曠世集の撰者あつ堂号
をりあり尾陽檀木堂主人と序よ書
ありや

目よるま紫よ山時を 初 櫻

愚考孟子曰口之於味也目之於色也耳之
於声也鼻之於臭也又新撰万葉よ綿
曠野策師行目見山花身聴言初よ五月
山卯花月夜時ききけともあり又初
よも此白をよ堂の三度切の各白あり
よ世の人口よあり

云声不と語のゆーや 社字

雨柳曰源三位於故一声をさるる小島を以て時を雲
海らりりよきをさるるゆく

社節 十日 十 月 夜 舟 家

弁地曰壬生忠見いほるるいふ所をゆくはむ郭を
浪のつりるるすい夜涼手に浪を時を此京
物を建てるなり

阿ふ形しや今起て雲をくたす

愚考の金葉集さよふけて集るるあまのりをそか
と書き人ほくふふさるるきく魚りのきか

峠ありて双抱つて月見 ありぬ

愚考の定家卿いさくらとてまほほぬありて関
する心もさるるはう一そ月の入家の侍もさ叶ひ
る心や浪化解入云は秋をいさくらとて雲をさ
あふふふふと云白れ注し引て阿かを氷

ありつー改入祖翁の自画賛いさるる表は雲ふ
木履うげしして出さしとさるるしふさるるの秋意
しして考ふ今すしー

名月や 年よ十二を宿るなり

古連曰八月十五日よ歌す紀約言十二世中安勝
於此夕之ぬの意しや又続古今集天曆序製月
さるるよるる月を建と今月のさるる月の月し似る月
それなり

名月や 海よりありたりん ありん

漁村曰河花集よ秋の夜の月し心のあくられて
雲を歩ふ物を思ふふふふのちあふの秋し似るり
秋しつゝ夜はさるるふふと見る月夜が

愚考の十二夜を中右記云保延元年九月十
三日今宵雲津明の變乎法皇明月を及る

中夜位出と云に申すは記さる中津門右大臣殿
原史入定公の家夜る事ハ碓礧天皇の御時や
又曰建仁寺の三益和尚十三夜の侍の序云よ
此夜幾月より延喜御時と云

暮いりよ月のみまゆりく海の果

愚考朔日の月のる事天文志曰月朔見東方曰
朏又謂之例匡白の意を在あか入朏と云とい
と云いりよるや月朏集ま有りといぬり白こ

何るのえまよも似れ三日の月

敬録曰白端日月の三日生明之名有り杜清少野
月似磨隱或を玉の寧月初月若月等の名
を何事と云る事有りよるを似れと云

夕月夜行發げしてあつて見む

愚考新撰多葉あふ夕三里夜と云てユラクユ

と訓すは日の月出て著方までよ三里のるを
歩行す一きの名よや夕月日終月日すして月
をラクと訓すは有りひるり一

電北日や虹改夏の一般の 色

と角曰遠く伽藍の源氏有りとはを一格意
として凡百番のうらまをて目よ立初身ちりきこ
雲よ起臥 中照十とを何あり試し、清く
云やみちりをあつて江口の里りて宗因やんれ
と云はれ方いりれいこ一と連といひるを承りて
と云実を控さるふ朧皆入入て傳れと云二と云
え有る事と初も有りり一とよ天津とて云い
出すとあり

いとゆふを 雲らんよよあふよふまて

あふれ一と云後よいそくらんと云いひちりこ

定家卿のいさゝらもの歌を神比白ふ思す
きこもたれくらん

夜の雲にととぬやうよ枝ありむ

思考の古今集ふらりて見えは落そをぬ一筆林表
の枝もあひよふたれらる白雲とりの歌の奪胎換骨
此法をもて仇もわし古歌をえとを格別あり

二日ふもぬりるをちり形花のま

一書入る雷より友のまて酒無し海まかち聞て
はつふり一故終ふ人終るしてさやのてをさる伴を
かぬらりるをちり学房困樂のまらる一筆をよ
らぬぬ下るりりやめてをちり手は一年の後の環を
見らりしちるまよし二日とてぬり
をとり一暇をえぬや二日とてぬり花のま
よして志そあまると凝滞をさる心のかとを学房

一赤字紙ふも二日ふもとすすちるる

平目らまよし二日ふもとすすちるる

てぬりるをちりるのまての守略ことと

愚考はてらよし二日ふもとすすちるる

らぬらり続猿義ふ人のまらるる

初構はてよとて同し意もて人の氣もらる

ふらやしおまかとも何ハしと初構ふ執

るのまをわひかちりるをちりる花のま

をちりるまよし一研もてふ人の運ひる

松々さりの伊勢う歌堂ふ人を説

愚考伊勢の清を東洞院ふ任て産茶ふ説

ねありのまよしをまてよめり古今集ふ花を川

関ふもあまら枝葉のまらるる

ゆへおよそ

秋々否連致よあふんうう一着

吾侪堂曰是法野め一具といふもの形之於
手よりして連致の貝よあふんううとてさ
れとてさるるを
俛落致よよめと或人よいひひとてさるる
以我意を松浦の磯のうり一具の尻を
斤たひひして 愚考魚肉曰肴菜蔬曰蕪
廣自曰凡非穀而食物謂之蕪

一のさりのあふんううとてさるる 柏々致

愚考史記曰松柏為百木長守門固物を
松をいよしめて度年の膏よりりてんやす致
柏をさるるよあふんううとてさるる人よあ
いつる意形のうり一莊子曰受於命天惟松柏
独也在冬復善又王荊公字說曰松
柏為祥木長故松後公猶公也柏後白猶

伯也五雜俎曰松柏独以春抽新葉既長而後
葉黃焉又曰秦皇封松柏太夫又曰漢武帝
封松於大將軍又唐武后封柏於太夫人

又致や物とるる事と 手 様

五味堂曰或物派よあふんううのな残を
しきより 初まよんてあまのまの松の
後運送をさるる心快とて運て 愚考山家
集何となくまよあふんううとて目より心より
不より 山まよるる松の枝を何となく
花のまよとてあふんううの孔は古欲五より
を松の待りて 柏ひひとてえ朔の致の字眼と
ううとてあふんううとてあふんううの事

愚考白氏文集曰忽因時名發年幾四十

此今 今 一年は一途を二海より元形しと守と
ありし

伊勢浦や日本引使む多き此季

延味堂曰太神宮に造宮の材木紀州熊野より来ると

小栴子栗やひるくむ松の門

愚考続日本紀曰皇武天皇神龜二年播

大直漢古より栴子の栴を貯る伊勢お徳

よ石の上よりしりしりくまか水もせうかうし

くらの大ききしりしり細を捕む

月花のちりめを琵琶の本よりい

一書より月花の娘とて辛の娘月日此歌を

ゆゆしとつこ此琵琶のよきえるよは依りしり

月形花形といふよゆりしりしり此琵琶は孝子表す

よか娘やふいこの面いりしりしり

一書よりいこの面を此の面よりしりしり

之井寺拍子とてしりしりしりしりしり

しりしりいこの面いりしりしりしり

治部又見等の名ありて此面

初美の目出度名あり堅魚

愚考堅魚てカッホ十・カッホ一・よや鯉ハ北

条五代記云鯉鮪を毎年夏より至て西海より

東海一する伊豆お徳安房の浦より泊り上る

件の鯉を勝負よりしりしりしりしり

をよし交交し法持戦場門出の酒肴よりしり

を考と利ひし

初美や漢名の橋の今れさる

一書より張よりしりしり夜美よりしりしり漢名の

橋よりしりしりしりしり愚考元慶八年漢名は

橋を造る長サ五十六丈又正儘沙云を江國橋
鼻湖といひ有て湖と海との間よりりりり
是と淡名の橋といひよきまは荒閑探師左海
右湖同一碧と伝らるるをてふ所の埋の出で
そこの湖もさびたう入海よ成てきまは只
を江を名の弁と白此音を絶て久き後
名は橋を初名よるのさびてを初うと
る事よまをてくすり此橋名よ初よ心を初うて
いとちり初字強よ或女房のを江にちれよる
人よててていひて初いなるの又同一人よて
らぬぬとてて伝みよまはそらるるを初うてよ
るんごもむいよ初くよらるるを初よ弁のうみけ
て初よよ淡名のうていへんや初名を年
の夜よつるるを初いよてまは初名よまをて

西上人年らまはぬまをて其めりよ思ひ縁のよ
さしよええてう初よ初名は初名初名の始と
る初やまら初名よまは初名よ
一書よ田舎の産神話よまをてけりて敬
来よすらまをてけりてまをてあること云
己の年や昔れまの免来乳
一書よ己の年ま荷方うまをて初うて
る初名初うてまをて初うて
る則初名見よてまをて初うて
よ白延暦の最澄神護景雲元年よ生
ふ初よ親族盛鑑を陳らねて初名とまを
最澄初年長て初て日早初初初の色をま
よ一つとてまをて初うて初名初初初
思ひを初うて初又東福寺の岡山采箔初中

九月月一して声あり 建仁二年十月十五日
の朔誕生す時よ雷傳明奉の冬、雷を覚えて
何といふのそと雷と云ふのくと昔も我
生きたり時よ雷なりといふ傳教大師といふ重
國師といふ誕生の時の盛物の色と雷の白
きを記する名師の盛物を甘藷にて我ハ
え目のせよとて松竹の門餅を結美服を結
ふの裏上りなりと云ふも見えたるも新
あつ味こし已り男を省る白れまると知へ
我等式に寄るも亦るやけさのま
某尔曰るもくまきいやりきわたりて
まをむりつるやまくりりり人師兼は我のま
ころころくや
考居ておよりり梅のま

愚考拾遺集家伝とよあやういの花お折さよ
福さよも唐を居てつるま夜夜を成刻より
寅よて細居といふま寅刻より卯刻とこと云
梅の木よ枝やしりよや梅のま
一書よ神傳説弘氏細代民神と号す
愚考所意の徳ようら山一は遊遊きく山の松の
まよて枝中り木の枝のまよては古歌よまよ
るり一寄木を木の生のまよて息とまよ子息
息女のまよて実の子をりり人生所以泣何本一
幹面分得氣異息故泣重敵母義也故子息
息女といふ
まよる伊勢のまよる一ふりり
空味堂曰る一ま伊勢北人松田白當之盲人
よりて他階よ志はく白をすり毎よ紙よりふ

書きて竹の筒に入れて巻くを紙よりのを声
箱の片を山くしよたらふの白こと云く

事の尻 尾よりけしる 白尾 一の如

愚考 白尾の鷹とる 流尾の鷹之 知母國司
唐帝大納言 改教卿 鷹飼の名匠之 務の君若
らんとしよ 白尾を流尾にして 長野 鷹飼 一子
よりそらんしよ 流尾の白子を見て 雲よりくし
ひひていささかよく 舞揚すく云く 彼政宗の女子
を祢津貞重よ 嫁す時よ 舞引きとて 鷹
飼の秘書 悉く 階属す 流尾の茶葉より
そよとらん人 形くしよ 或時 流尾 泉院の朝平より
文化よ 舞のより 九八 舞より 及よ 中右 志田 家
の臣中よ 成祢津 祢平とりのよ 又日 奉祀 白仁 徳
天皇 四十三 年 秋 九月 甲子 朔 依 綱 屯 倉 阿 琳 古

捕 吳 鳥 獻 於 天 皇 召 酒 君 示 多 曰 何 多 矣 酒
君 對 言 此 多 數 多 在 百 派 得 到 而 能 從 人 亦
捷 飛 之 掠 法 多 百 派 信 号 此 多 曰 俱 知 乃 授
酒 君 令 奏 訓 未 幾 時 而 得 到 酒 君 則 以 尊 簪
着 之 足 以 小 鈴 着 之 危 君 殿 上 獻 於 天 皇 是
日 幸 百 長 遊 拵 曠 云 々 鷹 一 六 十 之 病 向 一 餅 一
十 六 品 之 極 方 有 流 美 一 三 四 之 分 向 一 亦 謂
祢 津 流 守 於 家 流 祢 津 流 之 鷹 多 之 如 之 む づ
く 一 千 一 百 之 向 一 時 定 家 卿 鷹 百 首 等 一
て 知 り 一 一

葉亭の主人 沈よ 我考を 巻き

ら 巻く 一 巻 意 の 向 一 故 有 一

沈よ 我考 一 一 向 一 古 考 一 一 仰 一 陰

愚考 葉亭の主人 王美之 一 晋人 字 逸

五十六のうらぐくを——名人の精匠を五持ま
七持もきくといつたお釈言壁抄は位江の窟の松
の根うちきく——とよめる松の根を折洗ふぬく
るのうとよき連ん水申は捌く精細の敷しを洗ふ
ぬくよ見ゆりやとよき——捌くるとよき修めらるら
むさくうの意を杜律曰日月に休る園を看弄
漁舟移白日うらふ情ありぬ——

面、白うしてやうてうらう——きく精舟か

愚考むれり——ろう見ら内よやうて精のほよりの魚を
こりきて舟よ折あげりさかかを見まて面白きさ
るるやうとよきこりやう——さるるを見りよせと——いげり
うのいほまらる命の情うとよき——むと精のあらま
入魚のうらう——きくや折うさねまの——を仁徳に
りぬ中ら——智度師曰一切室中命を中へ法罪中

殺生四罪為第一或書ふ古文林風の辞を
引て歡樂抄に哀傷多といふ浮世のさか
の忽しお替りやを記し——とよき 愚老記
りうらくはるる貞室のうを精し——て修り
まらう本傳る事ハ新覚未だ——

松子や藤 松子書人を恨らむ

一書ふ火桶は松子此花を画くするを後
水尾院の御製とよき又東後院の御製とよ
り—— 愚考松子紙よ云書おとらするの
松子楓山吹き連ん松子の恨むといふ云使
のえぬやう形ををりうらへ——

すむつきすこきよまの炭 俵

風谷曰松抄曰火にこきぬまのすむの心地
して人もすこぬすこまののちやとよめる

よ十二の女子の姿をゆめて冬のはすむつふ
そ火の形をさる今少くすさましくさま
難しきり又漢少納言すせありきさの
なみのすむつまを一番して炭俵の如く
ららしくをりて一台の主とさるる事なり

夕歌や林をいりし瓢の

此句を林と心持るりの風國抄西巻太康工
既よ泊船集評林句解金花傳袖日記本
し出守ま心好遠すの根えとゆふまき古歌
るりゆ一るり古歌の林歌百連ハ此句を林
と思ひしるりむまを只おかよそよふこつ白
の葉しゆ抱らけ一途よれりいほて入りと見ゆ
そ曠野の眼前夏の朝よありを兼おとや
いとむ又金花傳よ曰や少の台法かしの智

清風飛のるよ傳授といふをありありと
古より信しむる事ハ皆安よあつてハ既よ
古今抄よ曰夕歌や林をといふを切て讀し
夕歌の花と瓢の實とのな林の差別よて
る信ま瓢のをりくやさしき花の夕歌も
いりか瓢よるりぬりやとほやさういふのやと
あつていと云々 愚考みりり形りいりり
とそままをいり林をいりしの花よそま
りりり歌よ別あててい計てをちりよ又
るりり歌を只いりりよみりりりりりりり
まハいりしの花をいりりりりりりりりり
治定と夕歌やのやういりりりりりりりり
過去よ見りてあつていりりりりりりりり
夕歌を精して夕歌や只いりりりりりりり

貞觀年中始て僞位を定むと云

新教をそと子よかりるるりの

愚考新教の毒を人の忘るるに事なりを
りて風殺りし毒の油を殺し毒るる

善より業ありのりや毒の毒

愚考酒花集よゆけたるの枯葉のそよこ
といふ言を信いばち散らむは新をのり
けりるる手細るる

あの毒を換毒をよの使るる

愚考新古今集のよりの心算しきるるの
うきをるる方を忘るるのりるるるる
を換つるよ換毒しよるる

ひよるると新毒をよ女新花

一書よ続古今集に何るるを忘るるの思のを

勝宝七年始めて行りると云く又爾雅曰折木
謂之津在箕斗之間則云河也劉焯曰
天河在箕斗二星之間淮南子曰烏鵲
填河成橋度織女也俗傳曰織女七夕當
度河使烏鵲爲橋集林大斗記曰天河之西在
星煌く与参俱出謂之牽牛天河之東有
星微く在区く謂之織女

時を時や心時を忘るる

愚考最層にや万里小路正二位中納言
帝よ凍表を断りて以身みるきりるるを
傳りて世を逐れ多いて行来るる人太平
記よるるるるり時よ三年三十九中古の賢人
本朝の云忠臣とす命り建武二年三月出
家好心との二祖宗綱と号し迹倫隱王

愚考統世説曰後唐の都為秘書監時
強承業權貴用事与客燕陳列珍果客
敢無先嘗都食之必乞承業私戒主
表他日都至惟以乾藕子置案而已
都知不可啖講中出一鉄施碎而食之
承業大笑曰為公易之勿敗吾案台の意
を我人素堂亭へ移し例の蓮池より蓮の實
をえりて貯すも皆くひきりてぬけきり
くしん蓮の實を完うをいふと強をを高くする
の挨拶之也をのこすも不致し何れをのくら
無とくしるはらり

とこそ 砥 跡 六 中 一 き 志 津 玉 系

愚考閑錄六卷初又志志津三帝多氏
る心案の才子之大和國より來住して世に
名譽の刀工なりとるを今も砥抄書よ代て
世上の指ををりしるなり

砥抄て 我よきいりをよ 坊り妻

素堂云 榊下の坊よ舎りて坊り妻よ砥を好
みたる昔得陽の記のふとりりしりて樂天を
なりし記るる商人の妻の志らるるゆりしや
今坊り妻此砥をいりよ抄て翁を形くさめ
しそやともよ書まふしそまふにの
ふとりり記るる榊の坊地を代りとも又志るるむ
一書よ雅鏡卿のみよりし山北杖竹とよふ
けて古にさく衣う信るなり古歌とよふ
出らきて已う古にまひし志ししりのうまよ
とめてきふりしりらきめりし抄てまきうとよ
やきよ何れを砥抄のうきよしりし志るるの

をくくるりこの終状を書きしきめくすすともさる
とく此制強請ふいさくすゆり 和歌連歌を優美
よ教する 初はくきを考と寸故よきめくすすすす
さるす衣とくすすすす 愚考お字正誤折又云
きめくすすお名衣板之略一こきめくすすすす又お名
抄よ云 磁を衣をすすす又破よ依の西よみ趣よ
曰破勝 溜又菓破る衣家の菓をうはさるる
ささきハきめくすす折の類なり 又引板を略一て
ひくすすすすすすすすすすすすすすすすすすすすす
とよみおめくすすすすすすすすすすすすすすすすす
引の字同字同意よめくすすすすすすすすすすすす
是りこのらんるるるる

白 葉のちくぬそおーくすすす

て世中果のうきまハ横を日をつまりてらり
ぬすハはみぬをそのことさぬを葉の花のつら
う人ぬたうりてあうるらちん

のくすすすすすすすすすすすすすすすす

愚考よきすすすすすすすすすすすすすすすす
とむすすすすすすすすすすすすすすすすす
よ白葉固る不祥を去り又葉を種よ入の時
を目をめくすすすすすすすすすすすすすすす
さるるすすすすすすすす

のめははちのくすすすすすすすすすす

愚考天地の常とをほくすすすすすすすすす
天地の常なりとちりす

一夜あて三并さるる神志る凡

葉豊云三并さるるの語よすすすすすすすす

あつゝさむらひ人のいぢのまきあがりいへうへつらふやと
杞ひひい

木うらうらう二日の月の吹ちりら

去末孫曰二日の月とりひ吹ちりらと働きさるや
月とりひのまきあがり先師曰あつゝさるる二日の
さむらひさむらひ

木の葉焼 論るさむらひさむらひ

致新云司了温云詩法曰魏野之詩不燒葉
中無宿火 讀書窓下有殘灯

木うらうらう一吹とらまきさるる中

愚考 考の中を紙まてまきさるる中
既をうらうらうの疾気とけしきさるる中
をさむらひさむらひ

吾の之立雅姐よ曰隼之撃物遇懐胎者輒
敢不殺蓋其仁也

志海や羽白 黒鴨 赤うらうら

玄味堂云古依日記よ曰黒鴨の松系を踏て
移ふとよふ雨の名をまきさるる松の色まきさるる
信を雲のめく貝の色をすつとよひて五色
よ今一色まきさるる

火と不して衆日入成ぬ 冬 桜

秋亭曰秋て花の落みて抄よりかきさるる
はくを火と不すといふと中よりまきさるる
答てあつゝさるる

冬 菴 又より 湯心 水のさるる

一書よ樂天困居賦曰困居而復倚此任又涼
去末柱の巻よさむらひさるる

天智天皇元年八月廿三日今の男山ふくは
しきりしとく候時条の始々村上天皇天曆三年
四月中午の日平将門退治祈禱の爲るると
去るに後三月に改めしは花巻余候ふ日候時条
押頭使候辭人候陪後山吹と云ふに候時抄
よ定家野らりしと云ふに候時抄
ま人のいふに候時抄

きよの目やつりてよ 流し佛 蓮
愚考より傳傳曰四月八日浴佛以五糸水灌頂又
法華法數曰灌艾納都梁以上灌佛の三種矣
と云兼和七年四月八日律師靜安清涼殿よ記
いて始て初ふ又推古天皇元年始て灌仏云初ふ
と云ふ

面瘦て葵付ふら 髪薄

愚考より競るりく文武 天皇孝文元年三年五月
五日よ始りしと云ふ

あ 菜よりの七夕をそれたえよき
弁地曰万葉小秋の燈よ嘆くは花を白ふと
是てりきさうふよ是ハ七葉の花又秋の花尾
花葛花燈子の花女命花菜甘舞の花

五しきの夜うへりし 花
愚考より十月朔日百友夜を更ふは日野長小
中魚を誇ふと云ふは交面交回し意よや

舞姫よ表 度 指を折りしり
愚考より表をえ白す潜歌瑞午を以て
年中初事曰十月中の是なり 本朝月令曰
清見系より皇者世の宮よ在して琴を彈
ひたり是て天女天降り足琴声を感し五度

并記曰きこふうを承るり玉簪草と書入玉侍
擬室珠の美字有り葱の花をきこふうといふ
糊賣を露の髪の花といはく法いふらんとき
不うよ見えたるはくはく髪を承るり
るり後よ九寸九釐といふ

五美人

うげろよの抱つけん 我夜の邪

愚考 李夫人を前漢外戚傳曰李延年姝
なり漢武帝在宮中又曰婦女子也等あり
后夫人孺子婦人妻を有り漢書曰上思
夫人不已方士少翁言能致其神迺夜張
燈燭設帷帳陳酒食而令上居他帳遙望
見その時夫人の姿ありしと向くは武
帝傳を依りて曰是邪非邪也乃定之偏

何冊く其来選又夫本集よあま一人よ歌す
雅有秋ありき人ありつる煙月もよをよ
いものほらさそをたつるよえん

長風よ帯ゆるみをるの産部ふ

愚考 揚貴妃を弘農の揚貴瑛の女有り唐
玄宗よして此とす考妃を女友の位より
て后よはく相國よ比すと云く夫本集よ
言を揚貴妃よ歌す歌貴妃よあをる
りの花の色むらりの人此面影そする

りの数寄やむらりの美の候をる

愚考 昭陽人を十六年よりして漢室よ入生
涯帝のいほくみさるりしと云く夫
本集昭陽人よ歌すの歌をの細伝ん
るやむらりさあよ明らきてとく

六十年の愛ふまゝなり

花なりく極り一らなり牡丹の形

愚考西施を會稽の人物をいさう、彼は
の娘なり越王勾踐の宮女なり一を
范蠡誘て吳王よむにわらうを
百川等減曰西施を牡丹芍薬よ比す王隣の
詩芍薬法珠功已成毫音終日麤殘生吳
王美在應多恨写醉西子不自恨是ハ
芍薬を牡丹より改めし子細を芍
薬を植う一連ハ二年を花よりぬき之
牡丹と極り一連ハ蓋し花のよあり一連ハ
有り是則西子より此す有りなりとて
此西施を夫木集し陵園高の歌なるを
西施と入替するは誤り陵園高といふを

天子尚侍ありて陵園よ入是宮女連の号
ありて甚忌しきりの有りハ美人と振
替りて夫木集陵園高よ歌すり歌二首
雲の熱林の熱のほりりほく三代よも今
よりなりよなりか松の戸をとらてく
るその日よりなり夜も有りて月の
りいふ歌三玉集月よりいりよ見さるむ松
の門いてやとれりと端をてぬ方又白氏
文集よ松門曉倒月徘徊栢城を日風蕭瑟
詩歌とよその意ゆくら一有り隨煬帝と
よら陵園の意をよみよと云く

よの本よもよきよめきの持りか
愚考漢帝卓于小玉昭君をわら昭君ハ三
千第一の美女なり画工の端よよて止る

りのるりささきとてあそびありしに
一書ありてその名を白雲人の罪途と云ふ

枯枝よ鳥のこもりけり 秋の書

一書よはるるを李吟芭蕉書堂一派新派の
筆法に傳の一言とてま本集きくすなわくや
をいふゆへより我々のえこれたるをいふ
花のあはれの葉枯たるゆへに人るゝ世火の親おそ
あり

つねに酒の温の間に一たり酒の間

愚き酒を暖くしき温の間にありてよりとす
るゆへに云晋朝雜記南史よよ出たり秋炭
有昔羊誘といふ志歎の形よ炭を焼て木人
形ふ酒瓶をくくへせ客のきくゆへに彼
炭炭よて人飲んて酒をぬくゆへに

をもちとる宗書くの夜侍を上りし依りたる
りのるり月の雲を狂雲け雲の字よよ
まらるる

呼ぶるよはくろむのるき、勢ふ

愚考法然上人を美依の人名ハ源空
天台より出て兼安五年四十三歳よして浄土
宗を興し一向専念ありて建曆二年正月
廿五日東山吉水よおして迂化吟勢の傳
くろむるるきとる急仏三昧るり板こ
ハき書 興ありてつる童田也

愚考歌よえわくをもて禁斗よ嘆そめて
荒れ興ありみよりの山此歌を禁んたり
をくろむるこハき子年のおめくろよ木の芽
のふらるひくろるをのころくろるくろけ

入てまゝなりと形りむ花よみ美ふを形し不説
田と心の對あり

白魚の骨や式部の大江山

愚考式部を後一條院のありか集或部
の娘なり長えの以歌人の数ふ入大江山の
歌を則序の名歌なりて幾ハ白魚の骨
の繁々ぬーとゆふ心あり

唐崎の松を花より臆ふて

一書ふ此白か白菊三又平白此色を入り
能得る後人の意あり兼角ふヤセとま
ちりなせと波や去聲の入に上弱止て比良
の言松の花を名るうなはし可あたりい
奇く下りとるりそまそ花よりか松の臆を
面白くくむと未波定の中の波定のまを

なりかふふ

一書ふ花を尚季の意と

名なきに松れりる事ハ彼をを意て松を
祝すの意あり古今抄去来抄ふり
こま角去來の年皆松喬之我を只花よ
ま松の臆ふて面白くりーとこ一書ふ唐
崎の松様より臆ふてときん身三休あり
唐崎の花をまは夜見流してときん
手白りりときん

藁一把りりて花見の阿波

愚考阿波舟の森阿波舟の浦尾張あり
甚後朝長阿くら我を伊勢の漢萩おま
て妹意くらふ見はる月う乳伊勢の漢萩
を意て月見おを舟のさるるり藁意て
花見むる意能得あり月と花との心對

いして奪胎換骨の法あり

雲霧の 鬼 獄さよき 孤 世か

愚 号 既 芭 蕉 名 古 屋 より 津 崎 一 の 往 還
し 何 り 長 六 十 回 余 鬼 獄 を 美 濃 へ あり

関 六 へ て 爰 へ 旅 志 あり 丹 波 へ

愚 考 夫 本 集 へ 美 濃 の 玉 不 破 の 中 山 堂
頃 へ と 法 師 法 師 の 関 北 旅 川 定 多 寺 の 吟 あり
一 一 美 濃 旅 自 の 三 坂 を 六 中 と 白 妙 の 我 衣
色 々 々 々 連 一 の 旅 志 あり 旅 志 あり 旅 志 あり 旅 志 あり
る あり 宗 祇 法 師 へ 連 歌 の 中 無 之 記 列
の 人 々 旅 志 一 條 評 回 へ 上げ 東 登 列 あり
古 介 傳 授 有 集 介 三 十 六 歌 仙 の 一 人 之
文 集 二 年 お 列 湯 本 へ 寂 寸 年 八 十 二
名 智 出 て 布 子 賣 へ へ 更 衣

愚 考 旅 中 の 更 衣 へ 賣 へ へ 賣 へ へ 賣 へ へ 賣 へ へ
花 へ へ 賣 へ へ 賣 へ へ 賣 へ へ 賣 へ へ 賣 へ へ
古 介 集 へ 櫻 色 へ 夜 へ 深 へ 深 へ 深 へ 深 へ
花 の ち り り ち り ち り ち り ち り ち り ち り ち り
の ち り ち り ち り ち り ち り ち り ち り ち り

五月 雨 へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ

一 書 へ へ 角 曰 此 栲 の 名 大 へ へ 名 不 へ へ へ へ
ひ へ 矢 矧 の 栲 と へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ
の 天 へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ
へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ
水 へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ
へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ
お へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ
ひ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ

て及一子や又孝のおよむ所をうらみとらり
誓志の教なりへ

牛の形一考母のありけり月面

一書より万葉山城の強田の里ふるを物記
君を祀りハハチありそゆく此教本幡を
田をこころを助る事と云ふ勿論牛の有り
とりハ形なり

みより一考なりいふ秋立貝れき

愚考貝を千手経曰若一切之众生法天善神呼
ハ當ふ手自法螺すへ一器録より曰螺の物なり令
命を下し事を能く成すを告報ふ合をて之の
言をのりらふ寸勿論生貝を用ひ資乃付物
記曰大日如来南天鉄塔吹大法螺為說法以此法螺
授教迦教迦牟尼仏示然材菩薩然中鼻祖形

志後實面満入然樹其善善清古奉値過善
薩傳受生之才之時今然有文峯吹法螺
者等之众生之明眠方軌也自回自善して
云古形より貝の音をさすもあはれ杖立と
いふ説る事いふはむ何を名也又形なりその
白くくも何くもあはれ一ハ心只此の白く
居るくく推えりりさるる白く事ハ然し秋
立より其くくあはれさるるへハ度入依志の
越白といハる種と貝との間を照ふ見
えくく白くして受ふ凡意をりてを見
えくくいふも種と貝のうけりといふも
六月より十月より其形よりいふも火魁金く
故より後形の式ありりり人知りあり
去りり中古よりありりり之延教

吉野山と峰大野のゆふ

愚考系よも出さく吉野の山のよき系色も大雪に降るるを連てある外山の道よく見え不れくと形あり

夜々此日や不彼の小家の煤餅

愚考夜々の目とを夜を日よ次としるるるり孟子曰仰而思之、夜以終日晋書曰車乳練囊小数十の螢火を入以照書す以夜終日不破の小家と多不彼をを根あり月を活スるる詠ををすくすり此不と故ふ十三日の月ありふまはけき小家のるる連て不雷のるるふとらくと煤餅ふといふるふへしと連て不破の外ふうこらめ自はよとらとらるる一はよとら不破のを冊はと

いへく白川よも能田よも振連るるる大本意るるる一トもふいよて既屈法形るもも入るるをてくも不破関を武皇白鳳一海始て法列よ居らると云く

雲雀あり上よ休らよ 味らる

一書よ何系明く語よ際坂盤雲上秦城向斗看此らる雲雀より空よ休らるとりるる形ありと云

花の夜 宿ふ 似るる 旅夜あり

一書に忠度々のゆきふれてその志いけを宿とをえ花やまよひのありおるありの付く郭公形ありと祀とて笑ひたり

此考曰不とくすす多先を不長の考る連ハのく目よ極めるとい

二級の月を二人に見らまはるる
一書より祖算の蛇一人位とりよ一人二人を見ら
まはるるは修らまはるる

狩野桶と鹿をぬけよ杖の山

等々曰一説は狩場よりまはるる桶よりとすはるる
非るる一し狩野桶と号ふは法眼之信
未だ帝次帝といふは一時甚まふしして終るの
料より亮むとちまふし桶より花を学花の鹿
を画してひさのをまふると云てまはるるし狩野人
何れまはるるまはるる鹿をぬけよとるる

澤之部の墓をわらまはるる杖の号

愚考は名和尚但るの人名宗彭大徳と
住職永川東海と其墓正保二年九月寂
墓計時一箇石耳

子枕大もまはるる夜の声

愚考は海野慈徳野下悲雨棠入るるの
まはるるをわらまはるる杖の号
水の何れまはるるをわらまはるる
やまはるる

いくは茶をまはるる袖をまはるる

一書より夜のまはるるをまはるるの
まはるるをわらまはるる

天説てまはるる雪れ号

愚考は天説川をまはるる源位列後傍ゆり
ゆりまはるる田部不出大天説小を説の一
筋何れまはるる本朝後園十訓抄曰まは
院の北面佐後を清厨憲清朝衣を脱して
用人と成西新と号くまはるる又志を同

母々曰思爾齧指と云々孔子曰曾參之孝
舊感万里と云々故車を免て旧里の人小云
老少皆と強書多阿連と云々小指をこのむ身小
てと一白治らるゝ安小保氏本指の女の指指を
うりて一白此姿を成能せり身本の巻よ右を
既るる人本指の女と嫁よりりて小指をくらひ
中よりまゐるその指之本指の指葉た破ると
白此表を破りてくらひのこ指をくらひ身を破ると
既奇多を破りて阿連と云々と云々と云々此を
と云々ひと云々やと云々君うらまうと云々嫌ていよ万
水一巻よ本指の女と指をくらひする女と二人の
やうに注すのち大よ非く表と云々くらひ保氏万水
一巻第本の巻をくらひてま誤を知るへと云々
為 葉と云々くらひつらぬともならずや

愚考 鑑余 建 長寺 後 源 宗 慶 建 長
口年 北 条 時 義 建 立 冥 山 蜀 乃 隆 大
多 福 所 溢 号 寸 祥 宗 乃 法 兼 法 教 曰
掃 地 之 五 徳 と 云 々 自 除 心 垢 亦 除 地
垢 去 憍 慢 調 伏 心 長 功 徳 是 有 り 産 掃 の
奴 僕 と 成 ら せ 垢 塵 を 掃 け ち む 心 と 云 々 阿
ら の 妙 り 一 担 翁 の 白 又 産 掃 け 出 せ ち や
門 下 ち 柳 乞 と 云 々 又 吳 二 乞 乃 布 籠 の 籠 と
我 人 乃 是 乃 自 身 の 境 界 を 掃 け ち む 心 と 云 々
我 古 池 集 水 鏡 一 乃 命 危 の 状 を 解 寸 又 人 等
云 々

善哉聖人心何らん人か憂哉う形
愚考 強 祐 乃 詩 乃 却 娘 勝 粉 強 教 色 又
奈 波 乃 詩 乃 夢 面 常 娘 粉 鏡 洗 粧 不 退

唇紅又漢武故事曰幽吟錄曰武帝待
妾不後以同車の美女十六人自然の美
麗ありて皆臺面く更に入粉黛をささぐり又
ほか納まふ女をその邊をよらるる人のた
りたうとらほらりすと云て是則その邊をつ
く心ありとりの美をうくすてあつふゆう
くよそ故入惡の報の首をささぐり撰集
の人と心ありてあり

きぬしや余れりるりも 時を

愚考杜鰲 初雪をけり人多く歌あ悲ありと
を考つてのるるさまは撰集より志のあふ
きよそわくはさすのむゆふをささぐり
くやあつむむ惜していふ古詩を歌古くお
るるさまは流るるりすをささぐり只白く向
てを解しきぬしや余れりるりのをさすてその白く
をささぐりて一詩あり秋ありつとりの
るりさすのるるりてさすいむ人六指の罪を
をささぐりるりる

出たし目の目あり枕ありい

愚考詩曰角枕繁兮錦衾爛兮予美亡此唯
与獨助又白氏文集曰卷卷尾冷霜花重古
枕曰衾誰与共又卷白集入古詩枕古き
あすりるのうはりのさすさあはらてのるり
あすりる

虫介しし小袖あてるり女

愚考万葉集よ我妹さうりいみの夜下よあ
くさくあふあてるり我のうめやさすはるる
をささぐりるり摸写交態の法ありて男の志

声聞緣覺之飛花散葉を因と守らり花
をらりて空を悟り淨土の名号を唱一て
夕夕然とく未だの空も見え悟り解り
此より梵音お通の玄旨を合弁彼といひ
是といひ辭せしめて發すきし亦る多し
も仮抄よりしと思ひて序文をハ書
多し菩提山とあるは此より感すし亦
あり或は總より菩提所求之佛果也との
のり意味をさす只一誰とすりを海老
の眼を借り海月といふ

笑つらんつ降るるきけり一れ畠

於柳曰秋氏要覽曰生滅輪回曰空也迅速を
志す不定の義より九の義を則入回不定
をさめする

南を空をく方々のなくきす

愚考悲華經曰佛言南を去決定法佛世
号名号音声と云く瑠璃代碎曰秋氏
杯佛菩薩名号皆冠南を二字と云く源平
盛衰記云重衡卿の害をらりし時時を西
より向て鳴りしを南のたよりなり
時をけりしを西へゆくるを被る思ひ
入る

橋のりあり教えぬはりりあり

愚考日本紀垂仁天皇九年田及回ちり念
て空世國よりて橋を求めり十九年
崇徳元年三月後朝白雲を鳴らり又
空をさすりしを南の義をくけり
一人の袖の義をす

阿の事(こ)きや燈籠一ツ 又主コ母

愚考の燈籠を以て月元曰後臨川侯の此母
を以て用ゆと云々 東鑑曰追福万灯を
於顯公為救平家灵魂 孟榮多言万灯
供養被行と云々 一書又主コ母を於
別号としていふ多非有りコ母を以て戸の人又
コ母とよむ一 路ふ初懐紙の連るる見ゆ
西鑑や小町 此の母れ見る事よ

愚考市系燈籠を布祢の卜有り小と云々
の南の方入阿なめの落とりて起る
小町の母とを別落るる一 小町を兼和の
以小町良實の女有り古坂にて死すと云々
又冷泉家の書入古十九尊并出寺して死
すと云々 阿の母の落るるに家次并曰貞列八十

島入小町 阿とくろれ此有りと云々 杉屋の
あつと後もても阿なめしをのいと云々
為たの多り孝吟曰十の台を業平細長
の母ありと云々 此てふ人ハやと切てよと云々
二重切之を又人名一の傳授有り

女系花死我の里人そ達をのむ

愚考の古今集うひりりして阿なめれひる
る事人系統のそあやうりり心古款えるり
一書小町子めり阿なめ古寺(洞)もりき

ふつりいよのゆき(の)敷の并り入講うるを
高りと云々 新ら一 母と

神垣やたれひりりげん涅槃像

一書入金系集 神垣の阿とらとたれと夕

の交りし惠を法師より魚肉をばきつけ
しるすれ侍りやと云く

貞享戊辰の冬弥生朔日

東照宮の別當傍正の住房小

慈惠大師は庵執事法華

八種の侍りより言さるる事ハ

融雪のりよりして序果のあらるを

散花の間よりわたりはるり

愚考 東照宮に別當を東叡山内寒松院より
慈惠大師よりえ三大師のより天台 龍王融
院の良源より自分様をとり教を写して
曰我像をばさるるを邪魅をさけむと云
今東叡山より雨の像を才子孝紹に
きこしと云くは戸をさるる民形法眼の事

ありと云く 寛和二年 正月三日 入滅と云く

法華八種の傍八人ありて 二月二卷宛 傳りたるこ

と云く石淵より勅撰延暦十五年 乙亥某如

の母の冥報より終きらるるの條ありと云く

八種のりより存るか賀ふより出寸乞を法華

八種のりより傍徒より焼寸料ありと云く法

華第一序品より 天雨曼陀羅華摩訶曼

陀羅華曼珠沙華 摩訶曼珠沙華 散

佛上及法大衆

なるしと云く 自やるる此玉

愚考 經女成佛の事より法華經持護
達多ふよといひ心そ女は速よ佛より成る
をゆむやと云く 經女一ツの宝珠有價を
三子大千世界を以て佛よりなる佛則を

連因母陷飭鬼獄中故設此功德令法儀
鬼一切得食也

おのけの火をとる虫れうりさよ
愚考お掛切菴益燈籠あり

魂より法りの船よりの酒をとる向なり
愚考孟婆盆経曰七月十五日具設百味百菓著盆

中供佛之船よりの百味百菓とるなり
孟婆盆経の日本
紀曰神明天皇三年秋七月十五日須弥山此形を

龍を寺北西の墨ふ造りて行ひありと云々
魂より法り道より法りお盆あり

愚考うの龍を寺の西の墨の辺にたすありあり
つる人守守の系物ありとて水新と

龍とを喰ひたす心を感して試
厚くハぬ心併入るる丸ぬそ

愚考守守の系物とる年中十二月より不僧
多終雲雀杜鰲水新終鬱厚新鬱于水多之

十二月花多とて又十二月花ありとて
仁よ男ハぬとて経の名ハ玄あり西蔵比

丘あり群丁の花よをるは我食よ元一と
則此よ後つ併の曰是厚王るりく一

則りて厚るを建ると云々

燕と所寺ハ報とる

一書よ龍波の海より取るとて并ハさいさうら
たさうの曲をうりうり八日をおねきうす

愚考報をうりうりの納斗よとて乙多と寺の

途をゆく。夫木菓よ人すまて陸も香をぬ
古寺よ狸のみちを報うちき連狸のみよ報を
うすすりる狸の版報とりよめまよとこきすす
とき母をもてうりうてと下知しつるを忘る
寺の身行ころうう法とりよ相をふそまようり
そく心報を則太報るりうううのいとよ相を
りて帰燕の杖まとをちり名人の手原を又
格別なるのと為世あんの割敷とて好むも又をう

時の子よ本縁をうらる法中

愚考托鉢のするも食をとよりのる連と末世の今
よ至りて縁托鉢るるをすりもうけりかつそのみら
くよよ一々の主とるるまの右よ湯杖を、お瓦
よ鉢をお七家限うて食をとよ比丘の法律
りして持杖とりよこ鉢よ七粒あり木鉄金銀銅

瓦甕るり又鉢中の飯を五ツよかてこ一ツを
路行の仏人よ施しこ一ツを水中の泥せよ
施しこ一ツを陸地の泥せよ施しこ一ツを
七世の父母及縁鬼神せよ施しこ一ツを
法くく食すくく故釈尊曰日食上分をえて
曠野鬼神の分とく或る河利度母キレホの食
とく或る魂冥神の料よ充つ善く法鬼よ及よ
う故よ散飯ハと号く又律の法よ其数七粒よ限ら
又牛飯三飯三把と書るり木のく法あり
とらよよこの涙や夢よ本ありん

愚考徳倉の安國障るる日蓮上人心家の未
より文應の初より四ヶ毎の間岩窟よか童りて
安國障を製佐しよん故よりて号く守

雲外やうく二王の行際

西回蒼鷹。四葉。兩斤。回。又曰。雄ハ兄鷹。一ハ公
唯鷹。一ハ才鷹。一ハ又。廣忘曰。一葉。黃鷹。二葉。
松鷹。三葉。青鷹。

玄くつり。松。明。並。きり。る。り。燭。

愚考。名物。六帖。云。燕。同。詠。曰。戴。石。屏。之。於。小
麥。麩。胡。克。食。松。明。夜。南。燈。是。之。涼。山。之
志。松。心。有。油。物。如。蠟。山。西。人。多。以。代。燭。頗。不
畏。風。箱。根。或。之。鞞。之。口。之。く。く。く。く。條。外。を
未。祿。て。賣。を。と。り。り。

千。白。い。と。る。む。山。山。此。寺。

愚考。若。校。口。と。り。て。大。系。子。白。の。無。形。有
僧。主。多。細。川。玄。首。法。下。之。法。眼。結。已。の。宗。近
く。し。懐。紙。を。鞞。る。寺。の。付。お。と。り。り。時。不。天。心
の。以。と。り。や。鞞。し。山。山。此。此。や。誤。傳。ら。む。胡

な。夕。ち。し。花。の。魚。の。し。て

秋。を。な。わ。ぬ。く。盗。人。の。妻

一。書。不。樂。天。の。詩。不。大。体。口。時。心。總。苦。然。中。断
賜。乞。秋。天。白。喜。を。以。ら。う。く

柏。木。の。脚。氣。の。以。の。つ。し。と

成。美。曰。源。氏。の。菜。下。去。の。以。不。ひ。より。ま。い。も
わ。は。ら。ひ。傳。う。く。ひ。中。り。と。い。お。の。不。き。く。か。り
た。ら。し。し。う。あ。み。ま。は。る。る。も。傳。う。以。和。云。抄
脚。氣。一。名。脚。病。倍。不。阿。之。の。介
う。ま。し。し。と。無。不。破。の。不。依

成。美。曰。文。德。編。年。集。成。曰。言。聖。山。ま。て。秀。次。云
の。扈。從。不。破。万。依。十八。氣。人。し。と。と。不。自。害
時。不。文。祿。三。年。七。月。十。五。日
を。淺。や。浪。不。志。め。ま。り。樹。元

愚考志めらば標なり又昂く水面よきすめ切
なりをよるをよるを流分しと漢意の持分を
を流わ伸するは伸又至るを多分入込
しすふとるなりとや焼帛縹帛の類とい
又格別なり我々のといふをそり

林風不女く不万の 髭男

一書ふ今昔物語不日候條野の道不絨出て
往來の人をちやますよ一親光親臣は
めさき貞た李武等不任らききハ女車不
受ふてさう一やふてくる果して盗絨とも来り夜
服を剥衣むしと立ようたるを多椎印付は絨
のこぬを百捕しとと

袖そ 瘡々さ 呪條の 法編

愚考元亨釈書日候條法編元明天皇の侍
字釈る昌の岡基信初之夜の袖入虚空を
言薩のぬくしちあらを連あふをその袖を切
てその後安置す

美しき 襷 うきりき 去此水

一書ふ古詩ふ云備魚字春水

柳のうらめりあきりり の 卵

愚考端埤林の末ふり本字のうらふ登る
つめし子をうみけりて標埤と書ていふありの
子のあきりのすとりよその形のあ中一をきこ
しや伯父のふり又らいのふりるりし下集
ふ日五月の美端埤の子化す則七十二候のあ
るり孔子家語曰是八月一して化すと云九月
より四月と云上八月と

夕暮 深きもの えてりし

愚考なるを服との二台を思ふ人など五雜
姐曰胡妻不出市夕霞走千里夕妻を日
る事ハ條物も出ま上りてををて歸る人
之

愚考角カ此おろりを神代も色ありしを
人の代とするりて多垂仁天皇林七日當麻
速を遊るに家祿ヲ投教しそ亦飲を悉く家祿
よありし日本紀より見ゆ一説よ弓を勝方一
は此世といふ是れ非のその起りをををん
きふも又おひるをむとを出り

火鼠の皮の夜をくはねぬ事て
涙見せしし 所の時の木のく
きふも又おひるをむとを出り

法注皆曰火鼠の皮夜を火鼠布之行免也
つりのりくや姫の古より有りし 愚考姫の
二台を竹免りの語いとらりちのゆ子の以つら
ふ身を解しはくも玉の枝ををきしし
らよりつらさうまししくや姫玉の枝をうす
とて判ることくはて見はれハ云此條を
かきわ玉の枝をそ有る申の一を在大
つりのみむらししけりむらひもやも皮
あらもあしししきしあそをを女
姫皮さらもを焼て名跡るく日ゆとをり
皮衣れりぬのかしをて見ありしを後の二台
いそのうみの中納言子安貝とらしを
腰をす折るををけきしてけり有る
りのを焼くくを命をすくひや

うらまへを授けて彼を名にうらまへの
江の中を流るる舟とてまきくまのやうにうらまへの
五身とも行くとておぼゆるや大洗布を唐の火列ふ
柵む巖あり銀巴りま山の長さ三十里火炭
長さ云尺此毛もて織とるなり火炭 韻 舟入火
不焚毛長丈許可有布 亦謂大洗布是也
一書よる上を生敷お越るなり是らの後の糸も
あつるなりと云くまよめてるくまのい
よみちのまむ

何るもおおめわりの花の敷
月のおおろや花を井孔表
灯よ手をねおひはくはりの燈

愚考 獲夜ふ飛る井の君か一宿の
ふ威儀師の盗て連るるを大將の目ふとる

是とくう一ありて堀川の花を井の川
流るるを身入るは鏡として君奪
お社とるまきけくお燈灯火してま
鏡を二台ありて法定す毒くくを本
を引せ
一書に花を井君の二河をよみ
ら連て入水の侍なりとすらるる
おぼゆる向をうらまへのまむ

降達も入歯又痒の志ふらる
成美曰降達を日蓮僧の還俗なり
小うらまへの
上より降達とて又投まるとり
泉列界
の茶店あり

引於し車を批把のうらまへの
あつるまむのうらまへの
一書よる二台ありか養の車あり
まむの侍こ

愚考源氏葵の巻よ六条の息所と引入の大位
の北の方と葵の上と車立よよ仕下と女の
あつらふありていとさとりき疑ありいさ
の略し平琵琶の巻木を書換あり

六位よありし意のうハ章さ
代よあるまゝと安しと交わひて

殊一巻よのりか一

愚考伊勢の巻曰業平朝長いさのあふ
のりの使よ下りて新まよあるまゝして子ひと
より丑之口迄ありよあつらふありとら
よつらりたりとあまは道ありといよあつら
出れいまをさうりよして六位の階あり
あまの仁明帝の皇女怡子内親王は時
業平朝長六位よしてその後貞觀四年五

位よ叙す何りかういさとあつら
あつらりのりの挿挿あり実を此時懐妊有
て多りそまゆいよ意のうハ章とまはま
りのこ代ありの階ありおあせしとら
高階師尚とりよ祓宮殿の言階ありま
介よ系ま叶ありとあり以上關類抄の畧
文ありとて殊一巻を合百延あり京よ伊
勢一三十一六日往來七日よりして旅刺に
さるる旅中の用さうして雅よ綴りよとハ
そ能階とまあよ代あつらふあり伊勢とら
あり風雅の心あつらふよ心に思ひて五
七道をわらめらふとすういよあつら
のりんとあつらふ表を信淡平活の歌
見と内心の大腹中あり殊よあつら

詔の定まりのしるは法源をハ甲斐

愚考 詔を爾雅曰小馬之事文後集曰馬二
歳曰詔又物やらのるる二歳を詔としたりと
書りのしるは法源曰十三日とりよるる甲斐
の詔連十五日を物連とすし今宵九月しるは
詔引きて系物あまめりとすく公事根元日法源
系日の詔連を往古八月十五日より系物院
の所國忌よりしるは法源ハとす十六日よる
うはせしるは法源ハとす十七日よる甲斐詔連とす
とす十八日よる系物あまめりとすく公事根元日法源
公事根元よりしるは法源ハとす

杖のありし昔 淨瑠璃

愚考 杖亭の持の巻物ハ浄瑠璃杖のありし

十余年 浄瑠璃 沢角の両横 披平家よくハ
く琵琶の妙手よりしるは法源物語と
りし双紙をけりしとすし二十神を
りしとすし十二段とりしとすし
を云弦よめたりしとすし
ひらきたりしとすし
比紙とをりしとすし
又初めたりしとすし
也を云長之身とりしとすし
観覧交しとすし
しるは法源ハとすし
五輪碎 是れと五輪の本並とりしとすし
辛卯年 初秋 吉日 竹本 筑後 掾 友系 博教
花押 ありしとすし

三弦もろくして只身不ろくの一くち降るあり
あり

月よ柄をさしよふよふよふよふよふよふよふ

風俗文選よふよふ荆口山邊家澄り月よ柄ハリあり
そりて詮あり味嗜はけてありら連下よふよふ
ありあり 愚考許六も許六あり宗理法師の
白をさし心好よりや素味海をさしをさし
そ連ハ幾人ハ服起りよふそそ連下よふよふ
のありゆく月よ柄をさしよふ大君をさしよふ
よふあり史本集よふ友の夜をさしよふすく
す心月を我もの影よふよふそそ連下よふよふ
影をさし網をさしよふよふよふよふよふよふ
本集の影をさし柄もろくしてよふよふよふよふ
騒よふよふよふよふよふよふよふよふよふよふ

ほろろろろろろ活中と解りよふよふ曰維北有斗
西栖之楊星よふよふ柄のありりのを何そ月よ
柄をさしよふよふとしつろ白きさろり騒きくる古人の
胸中をさしよふよふの

よ木柱はろくハたさしてよろろろろ
使のよのよ返るありありあり

愚考よ木柱をゆりりよふよふそハよふよふよふ
よふよふハ使のゆりりありそ六帖我妹子の友
てるよありそよふよふよふよふよふよふよふよふ
ゆりりとありハよふよふハとて此のよをよふよふ
あり

ありよ木柱と猫の子を撰よふよふ
よふよふよふよふありありあり

愚考事林廣記曰試猫從頭捻首若尾起則

為祇若尾順而不收抵腋下則捷又格物論
曰猫捕鼠歎且暮目の星く午時望よりして糸の
ぬし其鼻端若冷唯夜至一日暖く

花の笑みよらうりゆり法後つ

一書曰多田満仲の口男美丈夫丸を伴光稚子幸
妻丸の首を切て才代とすは美丈夫丸の口十此
笑のあうり伴光のあうりるみしるるつと云く
愚考花の笑源氏細流仁明天皇嘉祥二年奥祓
寺大法師奉笑天皇備四十是始と正月より六月
までには生達するもの花の笑を祓ふ七月より
十二月までには生達するもの花の笑を祓ふ

歌合独古 隠首よりあうり

太舟曰井煙抄曰寂蓮顯眼を毎日あうりていと
うい何のりり顯眼を祓ふのて獨古を指しり

より寂蓮を隠首よりいげしていとあうりあ中の
女房例のとりつこのあうりといと名知より是を
先大御家ふ六百番歌合の時のりり

あうり歌合のあうり

愚考本朝語園ふ或序よりて頃阿六首の歌を
記して不用者の候小抄のりり押入て並張書
るあうりあ雲々六首あうり歌合あうり記して
あうりあ隠首隠天あうりあうりあうりあうり
又あうりああうりあうりあうりあうりあうり
すりてあうりあうりあうりあうりあうりあうり
を記してあうりあうりあうりあうりあうり
あうりあうりあうりあうりあうりあうりあうり
あうりあうりあうりあうりあうりあうりあうり
あうりあうりあうりあうりあうりあうりあうり

花のひの糸は勝連の糸と云ふハ秋立の皆の遠の
夕のとり入るに傳字紙と曰傳珍といふ傳を
よくみて尙且入いりて皆秋を引替ふは
樹を以て逐電と云ふと云ふは秋入もさへやと巧
みし一入葉の糸秋立のちりくつりといひるは
又之し一噴物の秋立りてを皆のう海ぬるり
半をさへりて葉やる 此 秋

愚考日本紀曰推古天皇二十年百濟國より花のつり
糸のひの糸の面方ともよし畑白の糸はハハ
島入のつり糸とすそのひの云我山岳の形を
る守と依てをるを止む時ハ須弥山及吳橋
の形を南庭に入築く路子の巧るりとして是者
實と名づく故ハその子此竹ハ依て能ハ

似たりと依あるるむ山岳の守りては遠ハ子の
代るるのつり糸

人の語りては葉やるを考ふは
愚考一本ハ瓜や苜を考ふはと出きりゆへハ
瓜やる守を考ふはとよみ又瓜やる守を
る守とよめるを大形を考ふは苜玉篇曰同
之切之ヨ苜を本草曰雄麻を葉といふ雄麻
を苜と云ふ又苜玉篇曰徒擲之切タシ此白を
まてまてるる之ヲ又字彙曰苜を子余之
切森之有子云葉を子云苜を子云ハ苜を
よむつり苜曰十月食瓜八月漸壺九月叔苜
采茶薪樗食我農夫は苜の秋をとりて
三白孔と云ふをえりて苜の字を考ふ

てきて此紙よ見えぬうゆへ入直の字をハ
書りて直まてのらむいと訓す羽切より書
んと上ふるまでハ是をとりて此紙の儀をこ
ねまぬるなり

おろししと日法の宍の夏時分
みぬ 同書 よよりう寸急伝

夏方よりさしぬいと 花北をさか

思考り或ものふ七条河原よりをさして
雷をさしぬるなりと柳原河原故のふより
よきさしぬるなりとさしぬるなりと云
雷れるなりとさしぬるなりと云

の舟とりぬると同書一平急伝と小徳の
宍より南國迄分より之里の舟より善光寺へ
来詣りて同書よりと云

急伝を説詠の大急伝と云なりして百方狂ひ
承とりぬる小徳の打鼓をこの邊に料と云
るをとりぬる急伝なりと云 寛永の三月十三日
大急伝、永延三年奮然始て行ふと云なり
ハ与奪とり百方とりぬる一子をさしぬる
なりと云 法皇よりさしぬるなり
花よ操の傳と海よりぬるなり

厚く母も静りぬきけハあらひよ
酒急伝よりぬるぬるのあらぬ月

法注ともぬるぬるのあらぬ月
あらぬ月ともぬるぬるのあらぬ月
酒急伝よりぬるぬるのあらぬ月
好て酒急伝よりぬるぬるのあらぬ月
良夜をぬるぬるのあらぬ月

あつり此月あつりさきて又一台を吟吟一味ひて
あ見えよよしきげえうういすやと六ひひ
うう一古縁ふひすに我名をとるげえた
のまきさく一うりこと此子鳴わううふ飯勢ふ
あやうの斗てま小き此あううのまきさくさうく
しきげえあふひすや喧又囂又嘈一とま
書て奔の乱まうり形之抄序のるりる事六
めはくくくわひいようりしををてひてまげえん
のりことのみなるくしをを戦ふと一うう一まき
奔ことりふまきるりカマヒスエカラヒスエラ
とまこと通きこと才一ふよりしきげえハううい
すやうてま一う字えんよくしきげえハううい
まうりともいんくさもあうらうあなをまきさく
るまきハうういをううまを誤るうり

飄 簾 の 大 き き 五 石 は け り け

成美曰 莊子 小我種之成而實大五石 させ
刺をばあつてまきさく此見え込るう

ゆうふらうのまきさく一ううふ帝人

何れゆふもあまを名 各利の地

愚考 蒙まてまその瓢を許由う借ふ奪ひ
まうのこ眞山ふううれまをりて水その心を
人のあをまきみりて瓢を絡りうら吞るうして
本の枝ふりけておくふゆの吹まうひ一まきさく
すうをううううううとてあやうてまきさく又まき帝
の勅すうううをううまきさく一と身ゆえこのまきを
らふかとの陽あるまきハ次のまきあを名利の
地とく三台ふ許由う借をとる守り古待曰長
安古来名利地空手無金行路難

成美曰白氏文集帝都名利場野吟を在
居又終夜清涼系弟笑欲不知疲也安名利
地此真幾人知

きいぬしやあまのうかきくあてやうに
空引あまのうかきくあてやうに

自らはくはるの休暇もす毎りの来毎

一書れうはるか抱うりふゆひまきあひて心とぬ
しあひぬ 愚考 師氏 葵の巻よ此葉の上十四葉

此君を上よるまきしゆ方るりとして色の寔上よは素
とまやまのこめやそくまひもらとあまをやま
又そのうへふあてやうのよとあまは此葉の休る
又ふー後折りのをたうーう札不して起る
あひぬあまのうかきくあてやうに
子の餅をいそひあまのうかきくあてやうに

人きついでいすじゆきあまのあまひり

一本よ法度の自心とすの非とオマニと荀感といふを
あまのうかきくあてやうに
とあまのうかきくあてやうに
とあまのうかきくあてやうに

あやあまのうかきくあてやうに
あまのうかきくあてやうに

ひり月のうかの空を消さう

愚考 源氏物語の巻よいとよあまのうかきくあてやうに
はりののをいとよあまのうかきくあてやうに
死相する東鑑よ曰ぬ君が令疲骨強自去
十二日以上腫御此る辨凶相之由医師時長誓
中之於今志か其特欲凡非人力之所也
まはあまのうかきくあてやうに 又東方朔傳曰黃雲

熟、青雲致虫、白雲致喪、黒雲多、赤
雲、主有火、是二、白と黒も必死の姿、とぬ、又
夕歌の上を、花を連て、之の、まじり、何、そ、歌
山、の、端、の、心、を、忘、ら、せ、初、月、の、う、ら、北、空、ふ
て、う、げ、や、ま、を、ま、こ、る、ま、此、歌、う、を、ま、ふ、ま、の
前、表、り、や、何、系、院、も、て、む、る、り、く、ま、り、あ、ふ
又、次、の、鞍、入、居、賦、の、台、も、夕、歌、の、上、を、ま、る、ま
の、ま、ま、ひ、ま、の、侍、り、て、ま、ま、う、う、ろ、階、ま、り、
て、ま、ま、う、う、ろ、夕、歌、の、上、の、侍、り、ま、る、り、あ、の、二
之、の、の、注、釈、法、注、ま、い、ろ、く、何、連、と、ま、ひ、み、る、憶
況、ま、り、て、無、益、ま、る、ま、ハ、紙、墨、の、費、を、ま、い、ま、り、て
畧、一、早、ま、り、て、又、何、や、ま、く、と、り、ま、初、ま、り、あ、の、の
義、理、有、と、り、ま、り、ま、り、ま、り、の、ひ、あ、や、ま、ま、り、の、
爰、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、と、り、ま、初、と、源、氏、竹、川、の、巻、ふ

いと、ま、り、ま、り、あ、や、ま、く、心、を、ま、ま、い、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、
ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、推、ま、り、本、の、巻、ま、り、ま、り、
何、や、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、目、う、げ、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、
清、と、り、ま、り、ま、り、我、依、儀、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、
り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、

愚考天子と林よ出て辱るを、相まふ是、上、帛

書、何、の、漢、書、獲、武、傳、の、畧、ま、り、又、古、今、集
入、秋、終、入、初、序、の、子、を、守、ゆ、ま、り、清、玉、氏、ま、り、
ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、

恨まらぬ潤あまのいふとくありて

静、の、前、ま、り、静、を、ま、り、ま、り、

一、書、曰、静、の、前、ま、り、ま、り、ま、り、捕、ま、り、ま、り、ま、り、
ゆ、く、清、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、

此善をまゝうすけしに於新公の位よの邊を欲
辭し名をきき女有まはして此亦やあつたれ
た辭の影入たつや志の志所のをこしやまじ
くうへしむしをいひよるすよしまのま
是義強を志し人のさしうして公よあつた
あつたしあつた許六の徳倉の徳しあつた
辭養を辭つ辭のいとけあつた曰吉野を
辭を好みあつたといひ別あつた

空輝の離魂の然れたをいひ

成美曰本草綱目人參條下人有人卧則受方
外有身一線無別沮不語蓋人卧則魂歸于
所此由用虚邪襲魂不歸舎病名離魂
故多いし片きの上略してあつたといひ
あつた思案カチ此病を一人をいひ一人は

人兩人ともあつた任渡野傳ふその志傳
を分あつたあつたといひ

治ありりるる 金二万兩

いとをいひ子を他人ともあつた

一書し京室所し京甫といひあつたあつた
あつたをえ限り二人の男子を勘當して
家財家養を賣代り二万兩此金を懐
りて生涯矣者の困窮をえしあつた
あつた此付もあつた世崎人傳ふあつた
やけとあつたといひ

五味堂曰楚國一人の孝子あり或時あつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた
て自分と郡主一許一出あつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた

種ありしとく附きぬらるる

そめり所の不を浅黄と秋のふき

一書よ蘇迷盧山を須弥山孔るるなり西域記
曰在大海中據金輪上日月所回迫於北ハ
黄よ南をまきく赤白西呉藍よをいふの
山そまをそめり所の富士と引直しきり
花とせしむらり 子れ一編

一書よ子花をりて花より了らる花の心花
とるるなり

修政をうけしと紙よ色みり

愚考事物紀系曰法葛亮始製之為神
供又阿やう入臨漱家の傳よ建仁の僧
龍山禪師元よ入て林淨因とりりのを
才子よ守此淨因りく修政を製す龍山

及朝の町淨因も末朝一後よ氏を臨漱
と改め南都よ住居すと云く

西王母 東方朔も自ら名に

一書よ平家物語よ曰瀧口ありし西王母と
いひし人も昔もありて今もなり東方朔
とやししものも今もなりて目よハ云ん

よりや野 野の言けみしり

愚考曲礼曰野野よくりのいしと花をを
るまら虚よ虚の對なり

ひらりやりて伊勢の八歌

一書よ後のひらるるのりよいひらるる

愚考後のひらるる九月朝白く伊勢よ豆雞
といふもの有りて今も不改りよ見事の歌ひ
と守古し一歌宮の雛憐八月朝白よ有といふ

疥面系此字わけ 入ゆく
愚考此白病体として世る入沙汰するを
非有り只誌をの酒入酔し一ハ酒さり
の美をとり入ゆくと介郎の涉袋糸のと
ささりて実論之和歌色を抄入去介面を脊
面とて介費とも書て家の後と世又平主の
挨拶之

疱瘡教の透と母のふと齒の白き

愚考痘を古より終日聖武天皇天平年
中筑紫北入新羅入渡津一て漂泊の折
うらうらゆりある時一泰澄和尚法を終
て湖息災有りといふ此病の基一き醍醐帝
後光明帝疱瘡一して崩御ありといふや又麻疹
を平壽二年始てとやると有り解ふハ懐

妊の月のを治する有りといふと

四月より髪そり宵に月うけ

志ら此中の事述べて記存る如也

愚考是も拙説の傍有りといふとも教を
くして物とも定めし一嵐雪の函師の
よて死去の傍に傳しゆ物とも定めし
ぬ有り余れ拙説の傍をいふつ有り事
とも源氏を物に傳しせりのうりたる
傳とて皆三白の伝志よて多るる
此二白の傍源氏者毒の傍往來りの
の中納言縫娘の傳大和拙説の武蔵の
るくたうときりて世る只平生の
るる一をりし心

よふこきるとる物をとりし心

空因やらのるよ人入毛う三節をうりて
呼子多其角うるやらん様多うん狙う
てれけよあそこを被乞の海皆を差する

秘電やきくーのむら相の本よ

五味堂曰古詩入曰三寸白雪降格相云々

あらあしー共捷乃 萩

一書以空居抄曰陸奥守為伴任果ての布也
うら時玄城聖の萩をあらして共捷十二合よ入
指への布りうまハ人何方ねく守て京一入
うら日ま二桑大跡よそを鬼船ーて人多
くあらしり車るくハあまこまうりうら茶
台多押合よ月しりよ便り後の白を西
司の人足るくうけりるーを

あしーのまいよなはるき

愚者大わりのうり一磁磁の由何しくのや
只息承事の川曹子のあやうん相狂く
寺く女のうけあきうらを帝あやみと
ふめやせまうとよのふぬいとてうりま
出忠網長馬くうむ心のうらまをうらぬと
泣くやんのあそりーうらま

抑ちらうと 例の 莖 及

書よ莖乃る形の下之尺取りて探干のめら
るくのるをよえ又ハ王々沙雪の乃節よ莖を
爰或る布をくく或るまを初をすすら莖乃
の使んくは守はるる帝下信ひの莖乃と
寂しき秋を女夫 否 とう
愚考私よ配するを女夫と云管を調一媒

阿のをて夫婦とりし

一書よくらり味多伊勢と河内の境入り云く

さきい子や山本を引しは読しむらむ

一書よさきいふやまを核あり西思を判本ありて

上よりの目めありしつらとをすいといふは辰を和一

も函よりさきいふ重の下略 一書よさきいふさきい

本とも和歌の上ありて傳ありのあり幸子

核こ又學子為種本法後阿の下略 一書に

延秀武村種と書此書日本紀私記よ曰福

草和名抄よ草枝々相値多て相當也 愚考

さきいふと核こ亦多きれとも此のを葛も

枝多なきも子こ核の説を然らけりけ樋の

是の瓶物の朝炭賣の妻や子ともめと云ふ

引をくす養るる

阿るよりより今そをらうち第云

吟とん さきみる 女中らり

浦ゆよ股 吹まらる月像

愚考の抽くしりの價といふも此をいふ今とこ

を物のりの價の待の待とその人のてり縁終状

るに押あてしり付とをを品すうしとの

くすりの初ををて背を

その巻のうち君をを移す

めと守すたいと心あ

汝のちうくみちり

よせうの流

秤ふくまふ人し 此 無

愚考秤を斤両を二守りのゆへ北越より

斤兩としり又ちきり杜秤略してちきり

愚考授衣よ曰入たのまを漢係帝此

まよしてゆへ此れ及入るをまの漢係よ

可らまをまのゆへを授衣の大將より

意志ををまのゆへを授衣の大將より

此のゆへをまのゆへを授衣の大將より

と秤いよるの考をのまを授衣の大將より

後白よその付をのまを授衣の大將より

